

スといふ義も詳ならず、鶯といふものは、即今海舶に載せ來れる黃鳥と云もの、此にウグヒスといふ物にあらず、中略ウグヒスとは、木にもあれ、竹にもあれ、その叢り生ふる所に、巢をくひねるはウと云ひけり、日本紀に竹村讀てタケフといひ、又萬葉集抄に麻の生ふる所をばウといふなりなど見えし此也、中略或人楊氏春鳥の事に依りて、其春鳥といひしは、惜春鳥、報春鳥などいふし者の類をや云ひぬらん、今試に漢音を採りてウグヒスの語を學びぬれば、惜春鳥の莫摘花果と啼が如く、又報春鳥の春起春去と啼が如し、護花鳥の無倫花果と啼が如くにもある也といふなり、されど惜春鳥は其形不踰燕と見え、報春鳥は如鶉、鶉色蒼と見え、護花鳥は似燕而小と見え、其形状の詳なる事も見え、ず、舜水朱氏は、ウグヒスは黃頭鳥に似たるなりと云ひしといふなり、黃頭は小鳥の鶯なる者也、麻雀にして其呼ぶ所に如きは、古より詳ならぬ事と見えたり、唯いづれにも此鳥の名、漢にして其呼ぶ所に如きは、古より詳ならぬ事と見えたり、

〔茅窻漫錄〕鶯字并百舌百千鳥

此邦古昔より鶯うぐひすと訓じ來れり、鶯は此邦にいふうぐひすにあらず、別に一種の鳥なり、鶯の形狀、漢土の書に數多載せたるを見てしるべし、

格物論云、鶯大勝鸚鵡、黑眉嘴、尖紅脚、青遍身、黃色羽、及尾有黑色、相間、三四月間鳴、聲音圓滑、爾雅黃鳥注、幽州人曰之黃鶯、一名倉庚、說文云、鶉鶉鳴則蠶生、倉は清なり、庚は新なり、感、青陽、清、新、禽、經云、

商庚夏蠶候也、注云、此鳥鳴時、蠶事方興、蠶婦以爲候、陸璣草木疏云、黃鳥黃鸝留也、常以葑熟時來、桑間里語曰、黃粟留看我麥黃、葑熟亦應節趨時之鳥也、正韻云、雌雄雙飛、鳴聲如織機聲、時珍曰、冬月則

藏蟄、入田塘中以泥自裹、如卵、至春始出、此等の諸説を考ふるに、鶯は此邦のうぐひすにあらず、朝鮮又は高麗に多く居るといふ、故に本草家にて、朝鮮うぐひす、唐うぐひすと和訓せり、中略昔年

伊豫の大洲山中にきたる事あり、又筑前於呂島に栖むともいふ、中略石川丈山嘲吾邦黃鶯非真、黃鶯詩に、春上竹梢、雖奏鳴、形聲毛羽異、倉庚見來爾、是鶉鶉類、幸被人呼黃鳥名、といふも、うぐひす

は鶯にあらざるを警るなり、羅山文集には、妾餅焦といへる鳥、うぐひすに充てたり、是は事物紀原に、昔人有遠戍、其婦山頭望之、化爲石、其姿爲餅、將以爲餉、使其子偵之、恐其焦不可食也、往已無及

矣、因化此物、但呼婆餅焦也、今江淮所在有之、といへり、此鳥は重修鎮江府志、寧波府志等にも見え